

二〇二五年度

一般入試① 問題（国語）

注 意 書 き

- ・試験開始の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- ・解答用紙二枚のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってかまいません。
- ・この冊子には問題が一ページから二〇ページまであります。万一、足りない部分があったり印刷が見にくかったりする場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。
- ・解答はすべて解答用紙の枠わくの中に記入し、用紙には、関係のない文字・記号類を書いてはいけません。
- ・字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。
- ・解答用紙を集め終わっても、試験監督の指示があるまでは席を立たないこと。

一、次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

そうして僕たちは六年生になり、四月から新しく担任となったのが須磨先生——現在の市議会議員の幸田秀吾——だった。須磨先生は幼い顔立ちで、そもそも若かったこともあって先生というよりお兄さんのような雰囲気を持ち主だった。最初の挨拶で「私のことは『スマイル』と呼んでください」と言って満面の笑みを見せたが、教室は静まりかえったままで、白けた雰囲気は漂っていた。

当時の僕は子どもながら、「こんなに若い先生が僕たちのクラスを受け持つのは無理だ」と思っていた。怖いことで有名だったあの池谷先生がバカにされていたのだ。この前まで学生だったような人の手には負えないに違いない、と。

唐沢という問題児がいて、その問題児ばかりに目を向けていたら真面目だったはずの真島が反抗しはじめた。今では真島と唐沢は手を組んで————というか唐沢は真島のラジコンのような存在になって———真島の指示通りに授業を壊している。

¹ どうやっても立て直すのは無理に思えた。

では実際に、須磨先生は真島と唐沢をどう扱ったのか———結論から言うと、どうもしなかった。真島や唐沢が授業中にどこかへ行っても何も口を出さず、彼らを見捨てて授業を進めた。そして授業の最後にならず、残った生徒に対して「最後まで授業を聞いてくれてありがとう」と声をかけた。

たとえば国語の授業の冒頭で、「今日は漢字テストをします」と須磨先生が言う。唐沢は「えー、嫌だ」と大声を出す。須磨先生は唐沢を無視して、「今、不満を漏らさなかった人、ありがとう」と言う。そして「筆箱を出して準備してくれた人、ありがとう」と続ける。授業中に唐沢が「こんなのやっても意味ないよ」などと騒いだときも何も言わず、授業終わりに「最後まで授業を聞いてくれてありがとう」と口にするだけだった。問題児は放っておいて、他の生徒に目を向ける——それが須磨先生のやり方だった。

須磨先生が作ったルールの中で、僕がもともと気に入っていたのが「授業中の課題を先に終えた人は、他の人に迷惑をかけないかぎり好きなことをしていい」というものだ。文字通り何をしててもよかったので、僕は須磨先生が学級文庫として用意していた手塚治虫の漫画を読んだり、図書室で借りた歴史の漫画を読んだりして時間を潰していた。このルールのおかげ

で、多くの生徒がなるべく早く全部の問題を解いてしまおうと必死になった。真島も教室から出ていくことがなくなり、課題を早々に解き終えて塾の宿題をやるようになった。

授業のことでよく覚えているのは、社会の時間に須磨先生が長篠の戦いの合戦図屏風（合戦の様子を一枚の屏風にした絵）のコピーを班ごとに用意して、「この中から信長と秀吉、家康を探して見つけよう」という授業をしたことだった。自分の班が最初に見つけようとみな必死になっていた。僕の班に歴史に詳しい矢辺がいて、家紋の旗から信長を特定したりした。合戦図屏風のコピーに三箇所の丸をつけて、一番乗りで須磨先生のところへ行くと、「どうしてその人物が信長だと思ったのか」などと根拠を出すように言われた。僕たちがそれぞれの根拠を提示すると「こんなに早かった班は初めてだ」と褒めてもらった。そのあとは「この合戦図屏風からわかることを思いつくかぎりたくさん挙げよう」と言われ、僕たちは鉄砲隊や馬防柵などについて熱心に考察した。

須磨先生は昼休みとき、かならず校庭にやってきて、僕たちと一緒にドロケイやドッジボールをして遊んでいた。³ ころにはみんな須磨先生のことを「スマイル」と呼ぶようになっていて、スマイルが提案した「ボールを二つに増やし、一つは女子専用にする」と言うルールのドッジボールが好評で、毎日のようにみんなで遊んでいた。

最初は反抗的だった唐沢も、他のみんながスマイルに従うようになると虚しくなったのか、あるいは先生から無視されることが恥ずかしくなったのか、問題行動を起こす頻度が減っていった。

ある日、掃除当番だった僕と唐沢が乾拭きをしていると、スマイルが唐沢の横に立ち「真面目に掃除してくれてありがとう。唐沢くんが毎日学校に来てくれるだけでも先生は嬉しいよ」と声をかけているのを目撃したことがある。その日あたりから、唐沢も「スマイル」と呼ぶようになった。

スマイルがただ優しい先生で、生徒に決して怒らなかったかと言えば、そんなことはなかった。スマイルはかならず「○をしたら先生は怒ります」と宣言し、その約束を破った生徒には怒った。唐沢が給食当番をサボって校庭で遊んでいたときは、唐沢の近くまでやってきて胸ぐらをつかみ、「もうサボらないって約束したよな」と大きな声を出した。そのときはあの唐沢が半泣きになって「すみません」と謝っていた。

一学期の間に壊れていたクラスを見事に修復してしまったスマイルは、二学期になると「ホメホメ係」という役職を作ることに決めた。「ホメホメ係」とは、一日の終わりにその日いいことをした人を褒める係のことで、スマイルが作った「ホメホメカード」に「誰が」「何をしたのか」を記入して提出する。

具体的に何をすればいいのかわからず、誰も立候補しないしていると、スマイルは「小川くん、やってみませんか？」と僕を名指ししてきた。問題児というわけでもなく、かといって真面目でもなかった僕は、⁴どうして自分が指名されたのかもわからないまま、どこか名譽であるような気もして「わかりました」と引き受けた。

それから僕は、毎日誰かがやった「いいこと」を帰りの会の前に記入してスマイルに提出した。スマイルはそれを発表し、指名された生徒を起立させて全員で拍手をした。「高宮さんが消しゴムを忘れた小島くんに消しゴムを貸してあげていました」「角さんが体育の授業後に誰も見ていないところでゴミを拾っていました」「谷崎が給食係を手伝っていました」など、僕はなるべく偏らないように気をつけながら、毎日誰かのことを褒めた。内容は忘れてしまったけれど、唐沢の名前を書いたこともあった。全員から拍手された唐沢は照れくさそうな、満更でもなさそうな顔をしていた。

二学期の途中でホメホメ係が二人に増え、森島と誰か（忘れた）が就任することになり、僕は任期を終えた。同時に、教室の後ろのロッカーの上にホメホメカードが山積みになって、係の人がそれを取って書くことになった。

最初にやったのが誰かは覚えていないのだけど、係以外の人がホメホメカードを書いてスマイルに提出したことがあった。スマイルはその生徒に対して「感激しました」と言い、それ以降、ホメホメ係かどうか関係なく、気づいた人がカードを記入するようになった。毎日のように四、五人が表彰されると、スマイルは「週間MVP」というシステムを考案し、その週で一番ホメホメカードに記入された回数が多かった人が週の終わりに特別に表彰されることになった。

「週間MVP」の制度ができてから、⁵教室の雰囲気はどこか変わったように思う。当番ではない人が給食の配膳を手伝ったり、授業後に乾拭きを始める人が出てきたり、長距離走で先にゴールした人が最後尾の生徒の横を走ったり、自分の名前をホメホメカードに書いてほしくて、露骨に人助けをするようになった。

僕がスマイルに苦手意識を覚えはじめたのはそのころからだった。森島もクラスの白々しい雰囲気がとても嫌だったようで、僕たちは帰り道によくその日目撃した「ホメホメ狙い」を報告しあったりした。誰々がこっそり自分でゴミを捨ててか

ら、そのゴミを回収してホメホメを稼いでいた、とか、算数の教科書を忘れたら周囲の席の全員が「俺が、私が見せてあげる」とアピールしてきた、とか、クラスのサッカーボールを昼休みに校庭に忘れたら数人がボールを見つけようと必死になって校庭に出ていった、とか。僕たちの間では、「週間MVP」とは嘘つき⁶のことであり、先生に叱られることよりも不名誉であるとされていた。

とはいえ、そういう雰囲気は苦手な僕たちは少数派で、池谷先生のとくのように反旗を翻すことはできそうにもなかった。ほとんどのクラスメイトが「ホメホメ狙い」に必死になっていたのだ。

ホメホメカードが定着した二学期の途中に、スマイルは次の一手を打った。「感謝カード」という紙で、⁷誰かへの感謝の気持ちをカードに書くという気持ちの悪いシステムだった。このシステムの気持ち悪さに拍車をかけているのが、「週間MVP」と同様に「感謝MVP」という制度が生まれたことで、その週にもっとも多く感謝カードを提出した生徒が「週間MVP」とともに表彰されるのだ。「提出された数」ではなく、「提出した数」が表彰の対象になっているというのがポイントで、このせいで「存在しない感謝」が捏造されることが常習的になった。

さらに加えて気持ち悪かったのが、教室の後ろの黒板の横に「感謝の木」という掲示板が貼られ、提出された感謝カードがそこに貼り付けられていったことだ。感謝の木は「感謝MVP」狙いの生徒たちが日々記した大量の感謝によって瞬く間に埋まっていた。スマイルが途中から感謝カードをさまざまな色のカラー用紙で印刷するようになったこともあり、偽善と虚飾に満ちたカラフルな塊が教室の後ろに掲示され続けていた。

ホメホメカードと違い、感謝カードの対象はクラスメイトに限定されていなかったもので、両親や祖父母に感謝したり、スマイルに感謝したりしているカードも数多かった。授業参観の日はスマイルが誇らしげに「感謝の木」を保護者に見せたりして、自分への感謝カードを見つけて涙ぐむ親などもいた。

三学期になってもホメホメカードと感謝カードのシステムは継続されていて、次第に「ホメホメカードを書いてもらうために誰かを褒める」や「感謝カードを書いてもらうために誰かに感謝する」という取引のようなものが主流になり、「感謝

カードを書いてもらったことに感謝する」というメタ感謝による得票数の水増しなども常態化した。感謝カードの印刷係が感謝カードを寡占状態にして、印刷係に対して感謝カードを書くことを条件に感謝カードを受け取ることができる、というシステムが誕生したりして、もはや「感謝」とはなんなのかよくわからなくなっていた。最初から一切カードを記入しなかった僕や森島はそういう「感謝の輪」に加わることができず、帰りの会で表彰されること自体がなくなり、クラスでの存在感も消えていった。

最終的に、多くのクラスメイトたちはスマイルのことをほとんど崇拜しているような状況だったと思う。どうしてもその雰囲気馴染めない僕たちは、最後まで浮いた存在だった。クラスメイトからすれば、邪魔な存在だったかもしれない。卒業式のときは、クラスメイトのほとんどが号泣し、「卒業したくない」「もう一年このクラスを続けたい」などと口走っていた。唐沢も完全にスマイルに掌握され、「須磨学級で良かった」と涙を流していた。

卒業式が終わって教室に戻ってから、スマイルは「最高のクラスで、最高の一年間を過ごすことができました」と言った。「この先、君たちはいろんな経験をすると思います。辛いことや悲しいこともあるかもしれませんが、そんなときは、誰かからもらったホメホメカードや感謝カードのことを思い出してください。君たちが生きていることを喜んでくれる人がいることを忘れないでください」

僕がスマイル——幸田秀吾について覚えているのは、そんなことだ。嫌な思い出というわけではないけれど、未知の宗教に出会ってしまったような感覚と、その雰囲気馴染めなかった記憶だけが残っている。

僕がクラスメイトとそれほど仲良くなかったこともあって、六年一組のグループチャットには参加しておらず、当時サッカー部だったメンバーで作ったものしか入っていなかった。グループチャット内で僕以外に唯一スマイル学級だった金田は、翌日になってLINEに気づいたようで、「スマイルは地元に戻って建設会社の社長令嬢に婿入りしたから苗字が変わったんだよ」と解説してくれた。「今でも何年かに一度、六年一組の同窓会をやってて、都合が合えばスマイルも来てるしな。俺も五年くらい前に会ったけど、最終的に国会議員を目指してるらしい。唐沢なんかは『選挙に出るときは全力で手伝うので呼んでください』って言ってたよ」という情報まで教えてくれた。

僕は「どうしてスマイルは政治家としてのホームページの経歴から、小学校の教員をやっていたことを消してるの？」と聞いてみた。

「俺たちの学級を担当した次の年かなんかには、親父が病気で倒れて地元に戻らなくちゃいけなくなったみたいで、教員をしていた期間が短かったからだと思う」と金田が返事してくれた。「すぐに教員を辞めたって思われたくないんじゃないかな」

スマホを置いて、僕はスマイルが国会議員になった姿を想像した。十一歳や十二歳の子どもだったとはいえ、短期間で崩壊したクラスを立て直し、あれだけの支持を得たスマイルは、たしかに政治家に向いているのかもしれない。日本全国がホメホメと感謝に包まれ、人助けをすることが何よりも大切だという価値観が根付き、駅前には巨大でカラフルな感謝の木が聳え立つことになるかもしれない。

そういう社会はどうだろうか。僕は善意で満たされた社会に、正しく入っていけるだろうか。9
そういった社会で、小説家はどのような役割を担うのだろうか——というか、そもそも小説家の出番はあるのだろうか。

大人になったからこそわかるのだけれども、僕たちは日々の授業の内容やただ繰り返される朝礼のことは覚えていない。人生の多くを占める日常を忘れ、非日常ばかりが記憶に残り続けるのだ。現に、僕が思い出すのはスマイルが昼休みに一緒に遊んでくれたことや、合戦図屏風を使って授業をしたことや、「週間MVP」を表彰したことや、卒業式に涙を流したことなど、非日常的な記憶ばかりだ。

スマイルはそれがよくわかっていたのかもしれない。だからこそ、時おり変わった授業をして、昼休みに一緒に遊び、カラフルな感謝の木を教室に植えたのだ。

そもそもスマイルはいい先生だったのだろうか。たぶん、いい先生だったのだろう。意地の悪い性格をしている僕と合わなかっただけで、世界を良くしているのはスマイルのような人なのかもしれない。

「今週の感謝MVPは……唐沢くん！ 全員で拍手！ さあ、唐沢くんから一言どうぞ！」

帰りの会で笑顔を見せながらそう口にしていたスマイルのことを思い出す。10
教室に溢れる多幸感と、その雰囲気についていけなかった自分のことも。

問一 ― 線部 1 「どうやっても立て直すのは無理に思えた」とあるが、「僕」がこのときそう思ったのはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 新任であるのに加え、最初の挨拶で生徒を白けさせた先生が、問題児である真島や唐沢に支配されているクラスに受け入れられることはないと考えているから。

イ 若くて経験もない上に、子供じみたことを言って教室を気まずい雰囲気にした先生が、荒れているクラスに立ち向かうことはできないと考えているから。

ウ 最近まで学生だったお兄さんのような雰囲気先生は、次々と生徒が問題児となっていくクラスに対し、打つ手があるはずがないと考えているから。

エ 自分をあだ名で呼ぶことを生徒に許す、優しくて親しみやすい先生は、クラスの生徒たちの問題行動も簡単に許してしまいそうだと考えているから。

問二 ― 線部 2 ― 結論から言うと、どうもしなかった」とあるが、この表現から分かることとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア クラス運営をどのようにしていくのが注目される中、生徒を指導することには関心を持たず、授業を円滑に進めることばかり考えているということが強調されている。

イ 問題児をどう更生させるかが注目される中、一見すると彼らを放置しているかのように思わせつつ、要所要所では適切な声かけをしているということが強調されている。

ウ 授業をどう立て直すかが注目される中、自然体をよそおって淡々と授業をすることで、あえて特別な手は打たずに時間が解決するのを待っていることが強調されている。

エ やっかいな生徒とどのように関わるのが注目される中、彼らを変えるために動いてはいるが、本人たちには直接的に何もはたらきかけていないことが強調されている。

問三 ― 線部 3 「そのころにはみんな須磨先生のことを『スマイル』と呼ぶようになっていて」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 課題の出し方や授業に「みんな」が積極的に取り組めるような工夫があったり、昼休みに一緒に遊んでくれたりする須磨先生のことを、「みんな」が自分たちの先生として受け入れたから。

イ 課題の出し方や授業には「みんな」それぞれ自由なやり方で取り組める工夫があったり、ドッジボールの新アイデアまで発案してくれたりする須磨先生を、「みんな」は尊敬し始めたから。

ウ 授業中の課題を一番に終えると漫画を読んだり塾の宿題をやったりといったことを許可し、昼休みには一緒にドロケイなどをしてくれる須磨先生を、「みんな」は良い先生だと判断したから。

エ 授業中の課題に「みんな」が熱心に取り組めるような仕掛けを設けたり、遊ぶ時にはいつも笑顔を絶やさず参加してくれる須磨先生を、「みんな」は自分たちと対等な仲間だと思ったから。

問四 ― 線部 4 「どうして自分が指名されたのかもわからないまま、どこか名誉であるような気もして『わかりました』と引き受けた」とあるが、このときの「僕」の気持ちを説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 真面目ではない自分が急に責任の重い係に指名されたことを不安に思う一方で、立候補者が出ないで困っているスマイルに頼りにされたことを誇らしく感じている。

イ スマイルに苦手意識を持っていた自分が指名されたことを意外に思う一方で、クラスを良くすることに貢献できる新しい係の仕事を任されてうれしく思っている。

ウ クラスの中でも地味な存在である自分がつぜん目立つ係に指名されたことにうろたえる一方で、みんなの行動を評価する役職につくことに優越感を感じている。

エ クラスでも目立たない自分が急に新しい係に指名されたことにとまどいを感じる一方で、みんなが慕うスマイルに直接指名されたことは満更でもないと思っている。

問五 ― 線部5「教室の雰囲気がどこかわかったように思う」とあるが、「教室」の中の生徒はどのように変化したのか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア いいことをしてみんなから称えられることの多かった生徒が、さらにスマイルやクラスのみんなから評価を得ようとして偽りの行動までして点数を稼ごうとするようになった。

イ 思いやりに満ちた行為を称え合うような教室に居心地の良さを感じていた生徒が、露骨に人助けをして褒められようとする人が増えた教室に白々しさを感ずるようになった。

ウ スマイルやクラスのみんなに称えられることを単純に喜んでいるだけだった生徒が、称えられることを目的としてみんなに見えるようにいいことをしてアピールするようになった。

エ なるべく偏らないように気をつけながら称え合う対象を選んでいた生徒が、積極的に人助けをしている四、五人を集中的に取り立ててくりかえし称えるようになった。

問六 ― 線部6「先生に叱られることよりも不名誉である」とあるが、どういうことか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 褒められるために心にもないことをしたり、周りにそれをこれ見よがしに示したりすることは、浅ましさを感ぜさせる点で、悪い行いをとがめられることよりも恥ずかしいということ。

イ 自分のやりたいことをせず、他人に認められるために本心と違う行動をとすることは、本当の自分を隠そうとしている点で、やりたいことをやって怒られるよりも良くないということ。

ウ 自分の名誉のための行動なのに、他者のためにしているかのようにふるまうことは、自分を良く見せようとしている点で、自分勝手な行動をして叱られるよりも格好悪いということ。

エ 求められてもないのに、むやみに人助けをすることは、クラスの他の生徒にもそれを求める雰囲気を作りかねない点で、良くないことをして注意されるよりもたちが悪いということ。

問七 ― 線部7「誰かへの感謝の気持ちをカードに書くという気持ちの悪いシステムだった」とあるが、「僕」がこのシステムをどのように見ているかについて説明した次の文の空らんにはまる言葉を本文中から一〇字以上、一五字以内でぬき出して答えなさい。

「僕」が須磨先生の作ったこのシステムをよく思っていないことは、そのシステムの象徴となったあるものを
「」と批判的に表現していることからよく分かる。

問八 ― 線部8「もはや『感謝』とはなんなのかよくわからなくなっていた」とあるが、どういうことか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 得票数の水増しや不正な取引に対しても感謝を表すような生徒ばかりになり、このクラスの「感謝」は本来の感謝の意味とはかけ離れ、感謝されるはずのない人にまで向けられるものになってしまっているということ。

イ 存在しない感謝を捏造したり、感謝することの見返りを求めたりするような生徒ばかりになり、このクラスの「感謝」は他人に対してありがたいという気持ちを純粹に示すものではなくてしまっているということ。

ウ たくさん感謝カードを書いて得票数をのばすことを楽しむような生徒ばかりになり、このクラスの「感謝」は数字で表すことのできないはずの感謝が得票数という数字で表されるものになってしまっているということ。

エ 感謝カードを書くことで他人に感謝を示すこと自体を重要だと考えるような生徒ばかりになり、このクラスの「感謝」はそれ自体が目的になり、ありがたいという気持ちを他人に伝える手段ではなくなってしまうということ。

問九 ― 線部 9 「そういった社会で、小説家は――そもそも小説家の出番はあるのだろうか」とあるが、このときの「僕」はどのような思いをいだいていると考えられるか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 世の中の大勢を占める価値観に対し違和感を唱えるのが小説家の一つの役割だとしても、人々が善意に満たされればかりを求める世において、その風潮に異を唱える作家が存在していけるのか不安に思っている。

イ この世にまだ実現していない理想の世界を言葉を使って生み出すのが小説家の一つの役割だとするなら、人助けや感謝がすでに行きわたった社会において、それ以上なにを追い求めればよいのか分からなくなっている。

ウ 誰にも注目されることなく消えていってしまう小さな善意をすくい取るのが小説家の一つの役割だとするなら、すでに善意に満ちあふれた世界において、小説家は何かを書くことができるのかうまく想像できずにいる。

エ 多様な価値観が存在することを読者に示すのが小説家の一つの役割だとしても、人々が人助けや感謝をよしとする風潮の中で、その風潮に反する価値観をどのように表現し発表すればよいのか分からなくなっている。

問十 ― 線部 10 「教室に溢れる多幸感と、その雰囲気についていけなかった自分のことも」とあるが、「僕」はどうして「その雰囲気」についていけなかったのか。「教室に溢れる多幸感」とはどのようなものであったかに触れながら、八〇字以上、一〇〇字以内で答えなさい。

二、次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

以前、僕はある地方都市の高校の課外授業に招かれた。先方の要望もあってコミュニケーション能力をテーマに話すことにした。県下でも優秀な生徒が集まる学校と聞いていたけれど、評判に違わず生徒の受け答えがとってもスマートだった。こちらの話に対して「それは」という理解でいいですか？」といった発言がしばしば見られたことからわかる通り、客観的に物事を捉え、予想される結果を先回りして考え、何をすべきかを瞬時に理解する。そういう情報処理能力に長けているんだなと思った。

その一方で彼らは主観的に物事を捉え、考え、行動することに對してフリーズしてしまう。そういうことを本当にやっていいんだろうか？ と不安になるようだ。どうやら主体的な振る舞いは、身勝手だし自分本位なことだと思っているようなのだ。

僕はコミュニケーション能力における「共感」について話す際、「カレーの辛さ問題」という例をよく挙げる。

友だちとカレーを食べに行った。彼は辛いものが好きで僕は苦手。友人がこう言う。

「この辛さ30倍のカレーはめっちゃ美味いから食べてみなよ」

断ると気まづくなるから頼んでみた。一口食べてみた。辛すぎて美味しいとは思えない。

友人が尋ねる。

「な？ 美味いだろ？」

僕は生徒たちに「自分が同じ状況になったとき、どう答えますか？」と聞いた。彼らの反応は混乱と言っているものだった。ある生徒は「美味しいと同意を示すと思います」と言った。なぜ？ と尋ねると「その友人との今後の付き合いで得られるものを考えると、そこで『美味しくないと』言ったりするのはリスクだと思うからです」と、真顔で「リスク」という語を用いてスラスタと述べた。

3

僕はこういう場でリスクという語を使う人が本当にいるんだなとちょっと感動した。すると、別の生徒がこう言う。

「そういうときにあって意見を言って議論をしたくないです。やっぱり空気を乱してしまいますから」

「辛いものを辛いとただ感じたままを言うことって、そんなに避けるべきリスクなんですか？」
 「辛いって、そもそも意見でもないし、議論になりようがない気がするんですけど」

「辛いと口にしたら壊れてしまう関係だしたら、それって友だちなんですか？」

こういうふうに見てみたら彼らはうーんと唸った。

「確かに意見ではないですね。感覚なんです」と言った生徒に続いて、最初に答えた彼が「リスクというのは、将来的に見込めるメリットを考えたらなんですけど…」と語尾がゴニョゴニョし始めた。さっきまでの口調と違った言い切らなさが出てきたので、僕はこう続けた。

「リスクもメリットも全部予想ですよ。実際に何が起きるかは言ってみるまでわからないわけです。それも別に一大決心を必要としない、『いや、僕にはこのカレー、辛いな』と言うだけのことじゃないですか。だとしたら、自分が感じていることに蓋をしてまで維持しなくてはいけない関係ってなんでしょうね」

5

すると彼は「そうですね」と答えた。この「そうですね」は、これ以上面倒な話を続けたくないという遮断として口にしたわけではなさそうだった。客観性から答えへと最短距離で向かう、さっきまでの口調の揺らぎの表れとして僕は感じた。というのも、滑らかなしゃべりのときは違った、ちょっと困り気味の表情を浮かべたからだ。これまでのパターンでは進めない壁に行き当たって困惑している。

僕は彼らを問い詰めて鼻を明かしたいわけじゃない。そうではなくて、ただ問うていただけだ。自分が滑らかに口にできることが、自分にとってどういう意味を持っているのかを知る。チシキや情報といった自分の外側にあるものを知るのかもしれない、自分の内側を知っていくことは、けっこう大事だと思っている。

それに円滑で論理的な話し方は、自分の感情や感覚を見ないでいるから可能になっているかもしれない。「嫌われるかもしれないから思っていることを口にしない」とか「主観的な発言や行為は利己的だ」と自己キセイをハタラかせるとき、それで当面の人間関係は維持されはする。けれど、それは自分の感情や感覚を無視することと引き換えになっている。ある種の自傷行為になっているんじゃないか。

「カレーの辛さ問題」なんて滑稽に思えるけれど、たとえば会社の上役との食事の際に、自分の好きなものではなく上司らに合わせてしまうとか。あるいは同僚から浮きたくないから思っていることを言わないとか。「カレーの辛さ問題」は設定を変えて身近にあるし、高校生のことをとやかく言えなかったりするはずだ。この社会を生きていく上で僕らは同じパターンを演じていると言ってもいいだろう。

8

この10年くらい、やたらと共感という語を耳にするようになったし、コミュニケーション能力においても必須のものとして数え上げられている。共感そのものに良いも悪いもないけれど、「主観的に物事を捉え、考え、行動する」ことにおいて、共感が足枷になっていることが多いんじゃないか。そして、気づかないうちに自分の感じていることを素直に口にする妨げになっているとも思っている。

たとえばというなら、他人と握手することがともかく良いんだという理解ばかり進んでしまい、ときには求められた手をはね除けることもコミュニケーションなのだということが忘れられている。握手をしないことは、別に失礼なことではない。自分のソングを守るために必要な場合だってあるからだ。

共感が僕らの感性の発揮の妨げになる例を他にも挙げると、普段何気なく使っている「生きづらい」という表現だ。世知辛さを表す言葉に共感しているからだろう。奇妙な話だけど、「生きづらい」という表現を使えば、つらいことを流暢に話せてしまうという現象が起きている。同時に、そのつらさを共感できると錯覚する。

何をつらいと感じるか人は人それぞれに違うはずで、つまりは極めて個人的な感覚だから、他人の共感を阻んでもおかしくはない。それなのに「生きづらい」という言葉を使ってさえいたら生じてしまう共感に自分をユダねてしまっている。その

とき僕らは自分のつらさや苦しさを大事にできていないということにならないだろうか。「共感が大事」という表現が僕らの個人的な感覚に基づいた、振る舞いを制限することに一役買っている。

あなたのつらさ、苦しさはあなたの暮らしの中で生じている。つまり自分の人生をまっとうしているときに生じる、本物の体験だ。

それをちゃんと味わっていると否応なく感覚が生じる。痛い。苦しい。怖い。そこから感情も出てくる。悲しいし怒りも湧いてくる。そうして「なんでこんな目に遭わないといけないのか」と悔しい思いも立ち上がってくる。

ちよつと自分の経験を振り返って欲しいのだけど、自分の感覚や感情にちゃんと根をおろして話そうとしたとき、自分の内側に力がこもっているのを感じたんじゃないだろうか。本当に怒っているときは、わなわなと震えるし、腹の底が熱くなる。そこで何か言葉を発しようとしたとき、それは「ワー」といった叫びでもいいのだけど、感じていることや思っていることが身体からだの奥の方から出てきそうになった、奔流ほんりゅうみたいなのを感じたはずだ。

僕らが身体を持つ限りわかるのは、内側から溢れみなぎる力というものがあるということだ。僕が僕として感じ、思い、生きることは、あんまり社会と関係ない。社会に従って感じたり思ったりするわけじゃないからだ。

10

僕らが他人の考えや意見に共感してみせるのは、本当のことを口にするはいしょと排除されるから。その怖れから本当のことを言わないと思いがちだ。でも、そうではないんじゃないか。あの怒りや悲しみや喜びを覚えたときの全身を震わせる力が自分には備わっていること、自分が力を持つっていると知ることを怖れているんじゃないか。

普通にヒトナみに、和を乱さないように生きることが良いと言われてきた。その結果、それ以外の生き方は社会から逸脱いつだつすることになると思ってしまうたので、自分に内在した力を怖れるようになった。無力であることを証明するために共感を隠れ蓑かくみにしているんじゃないか。

（尹雄大『句点。に気をつける』）

問一 〜〜線部 a f のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ――線部 1「主観的に物事を捉え、考え、行動する」とあるが、この後に続く「カレーの辛さ問題」の例において、「主観的に物事を捉え、考え、行動する」とはどのようなことか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 友人に辛さ30倍カレーをすすめられた時に、辛いものが苦手な自分でも食べられると判断して注文すること。

イ 辛さ30倍カレーを口にした後で友人に「美味いだろ?」と聞かれた際に、自分には辛すぎたと正直に言うこと。

ウ 友人が美味しいと考えている辛さ30倍カレーが、実際には辛すぎて美味しくないと論理的に証明すること。

エ 世の中には辛さ30倍カレーを美味しいと思わない人もいるということを、リスクをとってでも友人に伝えること。

問三 ――線部 2「コミュニケーション能力における『共感』について話す際、『カレーの辛さ問題』という例をよく挙げるとあるが、「カレーの辛さ問題」について述べられるとき、この「共感」という語はどのような意味で用いられているか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 相手の考えや感情に対して自分も全く同じように感じているということ。

イ 自分が本当に感じていることは関係なく相手に同意を示すということ。

ウ 相手の思いに寄りそって自分も同じように思おうとしているということ。

エ 相手と違う感想を持った時は一切なにも言わないようにするということ。

問四 ― 線部 3 「僕はこういう場でリスクという語を使う人が本当にいるんだなとちょっと感動した」とあるが、ここには筆者のどのような様子が表れていると考えられるか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 友人とどう関わるべきかについて話すときに、物事を冷静に分析する際に用いられるような言葉を使う人を実際に目にして驚いている。

イ 友人との関わり方を話す際に、その関わりが自分のメリットになるかどうかだけを表すような言葉を使うことに違和感を覚えている。

ウ 友人関係のあり方について話しているときに、リスクという言葉を用いて客観的な説明ができる人に初めて出会えたことを喜んでいる。

エ 友人とどのような関係を結ぶか話す際に、感情的にならずスマートに受け答えができる人が本当にいたことに心を動かされている。

問五 ― 線部 4 「リスクというのは、将来的に見込めるメリットを考えたらなんですけど…」とあるが、「将来的に見込めるメリットを考えたら」「リスク」があると言ったとき、この生徒は、どのように考えていると思われるか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が思ったことをそのまま口にするリスクとこの友人と付き合っておく将来的なメリットを計算した上で、自分から関係を壊そうとしていると思われないように、誤解を招く表現は避けるのが好ましいと考えている。

イ 自分が余計なことを言って友人を悲しませてしまうリスクと長く友人関係を続けられるというメリットを比べた上で、この先も長く友人関係を維持していくために、空気を乱さないようにするべきであると考えている。

ウ 自分が感じたことを正直に伝えるリスクと友人と一緒にいることで受けられるメリットをあらかじめ予想した上で、できるだけ波風を立てずに、友人関係を守るような行動を選ぶのが理にかなっているはずだと考えている。

エ 自分の発言で不必要な議論を招くリスクと自分に都合の良い友人を確保しておくメリットを考えたと、トラブルを起こして面倒な事態になるくらいなら、自分の思ったことは言わずに口をつつしむのがよいと考えている。

問六 ― 線部 5 「すると彼は『そうですね』――なさそうだった」とあるが、いっけん生徒たちを論破しているだけのように見える筆者の発言の目的はどのようなものか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 円滑に話しているその内容が本当はどういうことを表しているのか、生徒たちに自分自身を掘り下げながら考えさせる。

イ 自分の外側にあるものを使って頭で考えずにすら話している発言が、いかに中身がないか生徒たちに自覚させる。

ウ 自分の内側の感情や感覚に気づいていないからこそ、自分は円滑に発言することができると生徒たちにさとらせる。

エ 論理的に見える回答で簡単に満足するのではなく、異なる意見の持ち主の発言に耳を傾けてより深く思考させる。

問七 ― 線部 6 「ちょっと困り気味の表情を浮かべた」とあるが、「彼」がこのような状態におちいつているのはなぜだと考えられるか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア リスクの有無で判断する以外に考え方のパターンを持っていなかったから。

イ 自分が感じたままをそのまま口に出した意見が受け入れられなかったから。

ウ 意味もなく答えづらい質問を投げかけられている気がしてならなかったから。

エ 決められた答えがなく自分の判断で答えるような問いに慣れていなかったから。

問八 ― 線部 7 「同じパターンを演じている」とあるが、「高校生」と「僕ら」のどのような点が同じなのか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人間関係を維持するために、自分の感情を表に出さないようにしている点。

イ 他人との関係を良好に保つために、円滑で論理的な話し方を心がけている点。

ウ 自分の本当の感情を隠すために、他者の意見に同調しようとしている点。

エ 利己的でないことを示すために、他者のために行動しようとしている点。

問九 ― 線部 8 「共感が足枷になっている」とあるが、どういうことか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 今の世の中では何をするにしてもまずは他人に共感することが求められるので、自分自身で考えて行動する前には必ず他人がどう思っているのか気にしなくてはならないということ。

イ 現代社会において他人への共感を示すことが大切だと言われ過ぎてしまっているせいで、他者とは違う考えや感情を表明したり自分の気持ちにそって行動したりしづらくなっているということ。

ウ この10年くらいの間に共感という言葉を目にする機会がどんどん増えていった結果、以前に比べると主観的に物事を捉えて考え行動できるような人が減ってしまっているということ。

エ 様々な場面で他人に共感するコミュニケーションの重要性が高まってきていることで、他人への共感を示すために自分の感じていることを素直に表現することが必要になっているということ。

問十 ― 線部 9 「自分のつらさや苦しさを大事にできていないということにならないだろうか」とあるが、どういうことか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が感じているつらさや痛みや生きづらさを、「生きづらい」という世知辛い世の中を表現する言葉を通して他人が共感できるように話しているうちに、そこで他人に共感してもらえた生きづらさこそが本来自分が感じるべき生きづらさだと思い、その感覚に身をゆだねてしまうということ。

イ 自分の極めて個人的な感覚であるつらさや苦しみを、他人に共感されるように「生きづらい」という言葉を用いて話しているうちに、他人に共感された生きづらさを自分の感覚だと思ってしまう、言葉で表現しきれないような自分の本当のつらさや苦しさがにしろにされるということ。

ウ 自分だけが経験しているはずのつらさや苦しさを、他人からの共感を得やすい「生きづらい」という表現を使って話しているうちに、他人に共感された生きづらさを自分の感覚だと思ってしまう、言葉で表現しきれないような自分の本当のつらさや苦しさがにしろにされるということ。

エ 自分の本物の体験であるために他人に共感されることが難しい自分のつらさや苦しさを、「生きづらい」という言葉に乗せて流暢に話しているうちに、奇妙にもそのつらさや苦しみを他人が共感できるものだと考え、自分の苦しみやつらさを他人と分かち合おうとしてしまうということ。

問十一 ― 線部 10 「僕らが他人の考えや意見に共感してみせるのは、本当のことを口にするのと排除されるから。その怖れから本当のことを言わないかと思うが、でも、そうではないんじゃないか」とあるが、私たちが「本当のこと」を言わず他人に「共感」してみせる理由が「排除」への怖れではないとするならば、筆者は私たちが現在何を怖れていると言っているのか。また、そのような状況の中で私たちはこれからどうしていくべきだと言おうとしていると考えられるか。「――と言おうとしている。」につながるように、本文全体の内容をふまえながら、一〇〇字以上、一二〇字以内で一文にまとめて答えなさい。

受験番号

氏名

	①
	②
	③
	④
	⑤

小計

◆右のらんには何も書かないこと。

問一	
d	a
e	b
f	c

二

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問十一						
と書かれています。						
120	100					

受験番号

氏名

	①
	②
	③
	④
	⑤

◆右のらんには何も書かないこと。

解答用紙2

合計

問一
イ

問二
エ

問三
ア

問四
エ

問五
ウ

問六
ア

問七
偽善と虚飾に満ちたカラフルな塊

問八
イ

問九
ア

問十
お互いのほめあつたり感謝しあつたりする教
室の中で生徒たちは常に幸せを感じていた
が、その幸福感を作りに出したバのこもっ
ていない言葉やうわべだけ感謝に對して、
「僕は白々しさを感じていたから。」

受験番号

氏名

①
②
③
④
⑤

◆右のらんには何も書かないこと。

小計

二

問 一	
d	a
尊厳	知識
e	b
委	規制
f	c
人並	働

問 二
イ

問 三
イ

問 四
ア

問 五
ウ

問 六
ア

問 七
エ

問 八
ア

問 九
イ

問 十
ウ

問 士					
自分の感情に素直にしたがって、いるときは、自分を感じてお	うれる、全身を震わせるような力が、自分には	備わって、いると知ること、を、私たちが怖れてお	り、筆者は、その怖れから、生じる「共感」に、し	ば、うれず、自分の固有の感覚や感情に、基づいた	発言や振る舞いを、大事にし、ていくべきだ
と書かれています。					120
					100